

旅とインテリア③ ～お屋敷巡り アメリカ編～ 塚口 眞佐子

前回、街並みや邸宅の見て歩きが趣味、と自己紹介した。今回は、そんな私が発見したアメリカ東海岸のお屋敷群を取り上げる。いずれも1885年から1935年にかけてのもの。同様のものは全米各地に存在するが、まとまって立地し、あまり苦勞せずにアクセス出来るものを紹介したい。これほどのものがなぜ日本で紹介されていないのか、不思議なほどだ。もちろん見学可能。建築様式はアメリカン・ボザール、フレンチ・シャトーなどが主流で、当時の財閥(新興であるがゆえ)に好まれた格式と伝統を醸す様式である。

場所はロードアイランド州ニューポート。NYから車で3時間ほどの距離である。映画「グレートギャツビー」のロケにも使われたRose Cliff、大富豪ヴァンダービルト家ゆかりのThe Breakers、同家の別れた妻が女性の権利拡大のロビー活動の場としたMarble House、中国貿易で財を成したChateau-sur-Merなどアメリカの金ぴか時代(Gilded Age)を代表する豪大な邸宅が10館以上公開されている。現在はカフェなども整う。予約は不要。ほとんどがセルフガイド方式で見学できる有り難いシステムだ。私はレンタカーで廻ったが、徒歩でも可。調べたところ、67番の公共バスが30分おきに付近を運行している。



Chateau-sur-Mer

紹介書籍も充実している。美麗で分厚な豪華書籍をはじめ個別の解説本、インテリア本、また関連書籍として『いかにしてニューポートは富豪の滞在地となったか』



Marble House



(原題: How Newport Became America's Richest Resort)などが私の書棚を飾っている。これらの存在を「発見」と言うのもおこがましいが、顛末はこうだ。いろんな文献を読む中で、「財を積みニューポートに邸宅を建てる」という文言に出会うことが多く関心を持った。この地名は、全米各地に存在するゆえこの事かも知らずに、単純にNewportと大邸宅を意味するMansionと入力し検索してみた。いきなりヒットしたのがこの「保護管理協会」である。欣喜雀躍、2013年のことだ。チケットは、全館共通パスが確か36ドルだったのを覚えている(当時は6館ほどの公開)。現在は1館20ドル、2館チケットは34ドルという。興味を持たれた方は是非、Newport Mansionsで検索下さい。いきなりヒットします。



Rose Cliff

建設業と技能者を支える 建設キャリアアップシステム 「インテリア設計士」を登録しました

建設キャリアアップシステム(Construction Career Up System: 略称CCUS)は、国土交通省が推進する建設業界の新しい能力評価制度で2019年4月から本格運用が開始されました。技能者(エンジニア・職人など)個人の資格や就業実績を登録

することで、その人のスキルを見える化し、それが受注や雇用・賃金報酬に反映され、ゆくゆくは建築業界の人手不足を解消することも考えています。まだ導入実績は少なく、民間工事では1割程度ですが、大手ゼネコンによる公共工事等では採用されつつあります。令和5年には官民すべての工事にも適用されると噂されます。今後どのように普及するかわかりませんが、「38024:1級インテリア設計士・38025:2級インテリア設計士」を資格登録いたしましたので、協会会員で同システムに登録・利用されている方、今後、しようと考えている方にご連絡いたします。(記・事務局)



大阪府インテリア設計士協会

〒541-0059 大阪市中央区博労町1-6-14 TEL. 06-6262-1488 FAX. 06-6262-1553

URL <http://jp-interior.or.jp/ois>

E-mail ois@jp-interior.or.jp

facebook「大阪府インテリア設計士協会」

4・7・10・1月 4回/年発行

発行人: 河野 洋二

編集: OIS 第1事業部会

日常 No.115

HASHIRIGAKI

葉知利書



万博公園

コロナ前の活動を取り戻す

緊急事態宣言も明け、コロナが一応落ち着き、日常に戻る気配も見えてきましたが、まだ、安心は出来ません。マスク生活が普通になり、すれ違う人に頭を下げられてもすぐには分からず「んっ?」「誰っ?」と戸惑うこともあります。テレワークも普通になり、人と接する機会が激減しました。ワクチン接種が進み、少しは安堵してコロナ以前の習慣を取り戻そうと考えます。

OISでも久しく顔を合わせたの親睦や勉強会ができていません。少しずつ様子を見ながら延期になっている見学会なども企画していきたいと考えています。

皆さんも、催事が再開された折にはぜひ参加いただき、近況を事務局にお知らせください。皆さんの元気なニュースを、まとめてこの葉知利書に飾れたらうれしく思います。

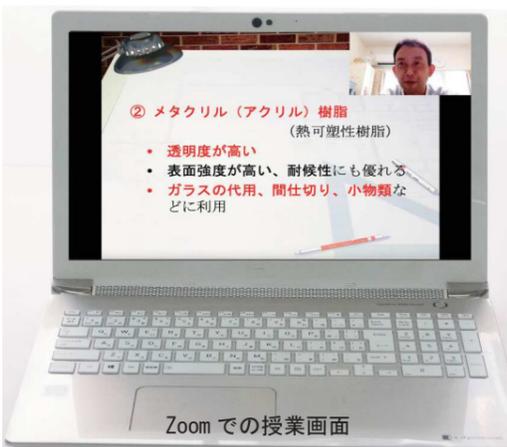


会長・河野 洋二

コロナ禍で広がる「リモート〇〇」

コロナ禍で、一気に「リモート〇〇」が広まり、デスクワークや会議、さらには飲み会なども経験された方も多いのではないのでしょうか。我々OISでは、Zoomを使った理事会等を開催しましたが、まだまだスマートにはいきません。

私は大学等の非常勤講師をしておりませんが、教育現場は、コロナ禍以前から情報機器の活用とリモート



Zoomでの授業画面

対応を迫られてきたものの、残念ながら今禍で最もうろたえた業界と言えます。しかし、一気に呵成にリモート化を進めざるを得なくなったことは、個人的にはよか

ったと思います。世界的大災害への対応もさることながら、日常では交通機関の麻痺、気象の影響等で登校できない場合や、入院している場合など、学習の機会を保障する手段としてリモートシステムは大いに役立つことがわかりました。さらに、授業が録画できるので、より一層学習の機会を担保します。

しかし、実技系は大変です。数年前から製図指導から外れており、昨年も今年もインテリア設計士検定試験の監督をしながら、「どうやって先生方はリモートで指導されたんだろうか」とそのご苦労に頭が下がる思いがしました。何より受験生も指導を受けにくい中よく頑張ってくれました。リモート製図指導の場合、描き方指導よりも作品添削の方が難しいのではないのでしょうか? これまでも製図の通信教育はありますが、作品提出から添削・返却まで時間を要します。リモート指導は基本的にライブですので、そのようなタイムラグを抑えたいのですが、画面上での図面のやりとりにはやはり限界があります。

私自身は朝が苦手で、出勤せずに自宅から授業ができることは正直福音となりましたが、一方でリモート受講の学生はさまざまなストレスを抱えていることも多く、呑気なことを言っているとは思いません。今後リモート授業は続くと思いますし、また併用すべきだと思いますので、少しでも学びやすくなるよう工夫をしていきたいと思っています。(記・瀬部 明)

O I Sの回想録 (7)

顧問 疋田 友一

今回は、私のOIS会長在任中(2001~2007年)に“家具のことをもっと知ろう”ということで企画した「インテリア・家具講座」と「家具研究会(KAGUKEN)」についてお話しします。

第1回インテリア・家具講座は「オーダー家具の構造と設計」をテーマとし、2003年10月24日~12月5日の毎週金曜日(18時~21時)合計7回の講義と家具工場(栗原木工)見学で開催されました。

講師は全てOISの会員で、元・(株)内外テクノ取締役の椿恭二氏(故人)、元・(株)天童木工設計室の小長谷光氏(現・監事)、高島屋スペースクリエイティブの梅田澄徳氏(故人)、(株)リブ代表取締役の宮本誠三氏という、設計から生産・施工に至る専門的知識・技術を持ったインテリア・家具のプロフェッショナルメンバーでした。

講師陣が練り上げたプログラムは「A:エクステンションテーブルの構造と設計図の描きかた(食卓)」、「B:食堂用椅子の設計と疲れにくい構造」、「C:食器類をうまく収納する食器棚の設計と構造」の3コース、下表に記載したテーマと指導内容(カリキュラム)で開講しました。

	テーマ	指導内容
A	食堂テーブルの基礎寸法	三面図・椅子との関係・家具材料と規格寸法・天板のデザインと木材
	補助天板を両サイドに出す天板が2倍になるテーブル	三面図・詳細図・人数に応じた大きさと脚の関係と脚の安全性について
	椅子の形と人間工学	三面図・詳細図・必要に応じて2倍にし多目的に使用、他の家具に応用
B	肘付き椅子の設計と構造	三面図・詳細図・人数に応じた大きさと脚の関係と脚の安全性について
	張り地と詰物の種類	皮・織物・モケット・スプリング・ウレタンなどの組み合わせについて
	キャビネットの構成材料	各部の名称・構成するパネルの構造と種類及び仕上材(天板・側板・棚)
C	食器棚の設計	三面図・食器類の大きさに合った収納の工夫・引き出しの構造
	家具金物と木材塗装他	デザインに合った化粧金物の種類・家具塗装の染色と塗料

この内容を見ても分かる通り、たいへんレベルが高く、今すぐ役に立つ実務中心の講座でした。

第2回インテリア・家具講座は「居間の家具」をテーマとし、2006年2月4日~4月1日の7回で企画しましたが、残念ながら受講者が集まらず中止となりました。

その代案として、3月に開催する事遊展で原寸サイズの椅子を作り出品しようということになりました。もう一人のインテリア・家具のプロフェッショナル、(有)スタジオA 2代表取締役の今西隆次氏(故人)が中心となり、リートフェルトのレッドアンドブルーチェアを作る「椅子の教室」が開催されました。キット化された材料で組み立て、見事に完成品。色もレッドとブルーにこだわらずピンクやホワイトなど、参加者は椅子製作の実体験を楽しんでいました。



インテリア・家具講座

2007年、「インテリア・家具講座」を引き継ぎ、今西隆次氏がリーダーとなり、メンバーは登録制、参加費は無料とし気軽に自由参加できる「家具研究会(KAGUKEN)」が発足しました。家具にこだわらず、建築インテリアエレメントなどの設計・製造・施工・監理をするうえで、若い人にとってはまだまだ不明なことがある。そんな問題点をメンバーから出し、毎回テーマを決めて研究する。長年インテリア・建築業界に携わってきた諸先輩方のいろいろな技法や技



2006 年事遊展

術を、次世代を担う若い人たちに引き継ぎ、今後の仕事の武器として役立ててもらおうという趣旨で始めました。

2007年1月20日に辻調理専門学校を見学し、2月24日に事務局にて辻調で使用されている椅子の構造などの研究会をしました。勉強会を重ねるうち、メンバーそれぞれの作りたい自分の家具(センターテーブル・サイドテーブル・TVボードなど)をデザインから設計図・製作図を起し、無垢材の家具製作に挑戦することになりました。



辻調理専門学校

2011年6月26日、今西さんが30年以上も付き合いのある奈良県宇陀市の別注家具製作工場「奈良屋」で家具に使用する無垢材料等を見学し、樹種名や産地、色調、性質など説明を受け 実物の材料にも触れることが出来ました。家具製造のための道具や機械類の説明もたいへん役に立ちました。その後、数回家具図面の作成しましたが、本来は完成作品を年末の事遊展に出品しようということになっていましたが、材料費や製作費・製作期間などの問題で完成までたどり着けなかったことが残念です。その後の研究会は不発に終わっていますが、ここまでの過程は次につながる貴重な経験であったと思われます。

「インテリア・家具講座」では椿さん・小長谷さん・梅田さん・宮本さんが、「家具研究会(KAGUKEN)」では今西さんがこのように家具について多くの専門的な知識と体験を我々会員に教えて下さいました。他の組織にないインテリア設計士協会の強みとしてもう一度、このような講座や研究会を再開してほしいと思います。特に家具のスペシャリストの小長谷さんを中心にしてOISの皆さんが協力していただければと願っています。

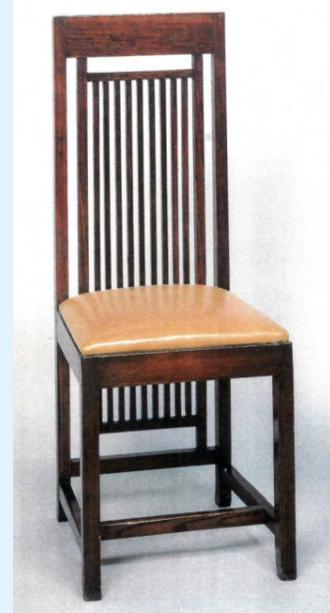


奈良屋

家具よもやま話

No. 11

小長谷 光



『家具は、建物と調和するよう建築という有機体の中に融合されなければならない。そのフォルムは、機械で製作可能な単純なフォルムでなければならない。』

これは、建築家フランク・ロイド・ライト(1867年~1959年)が提唱したもので、家具の性質と役割を明快に言い表しています。

今回取り上げた椅子と小卓は、彼が設計した邸宅に実際使用されていたもので、まさにこの言葉を具現したものであるでしょう。

椅子(H125×W45×D51cmナラ材・塗装仕上・皮張り・1908年頃)は、空間の中で必要に応じて分割できる日本風の透かし格子の間仕切りと呼応するデザインとなっています。デザイナーの名を伏せて見せられれば我々日本人のデザインかと思うほどです。素材はナラ材になっていますが、全体に木目を目立たせず着色されています。

一方、小卓(H65×W76×D46cmナラ材・塗装仕上・1908年頃)は、ナラ材の生地を生かしたクリア塗装が施され、インテリアに用いられた橙、茶、緑の色彩と調和するよう考えられています。決して大きな家具ではないのですが、堂々たるモニュメントのようにも見え、旧帝国ホテルの意匠を彷彿とさせます。

天板下の棚のような板や中棚を支えている柱は、用途としての意味はないようにも思いますが、それぞれ欠くことのできないリズムを醸し出し、テーブルとしてだけではなく、いろいろな用途で使ってみたい家具です。

脚先の四方転びの反り返った部分は、色が少し違って見えますが、素材の歩留りを考慮して継いでいるのかもしれませんが、



「寝殿造」考 ~ 円成寺本堂から平安時代の生活空間を考える ~

今井 俊夫

今回の円成寺見学会の参考に「寝殿造」について考えます。寝殿造と言えは、十円硬貨に描かれた宇治平等院の姿を思い浮かべる方がいるかも知れません。左右対称の両翼を水鏡に映す鳳凰堂の姿は、優雅で華麗な日本の美の象徴です。しかし、平等院鳳凰堂は寝殿造(住宅)にあらず、平安末期の不安な世情(末法)を鎮め救うべく建てられた浄土式庭園の仏堂です。

寝殿造は、平安時代を通して発展した住宅様式です。残念ながら、現存する遺構は1つもなく、文献や絵巻等で当時の雰囲気や推察するしかありません。昭和に入り、太田静六氏らの研究により、比較的史料が残っている「東三条殿」等、往時の寝殿造が明らかになりました。



「東三条殿」想定復元図 赤丸が「対屋」、寝殿とは渡殿で結ばれている

中島をもつ園池を配した広大な南庭は、儀仗と祝祭を兼ねた空間として大きな意味を持ちます。庭の北面に「寝殿(しんでん)」と呼ばれる主屋があり、「渡殿(わたどの)」と呼ばれる廊下で結ばれているのが「対屋(たいのや)」です。対屋は女性、子供、使用人などが日常生活を営んでいた場所と考えられています。

平安時代の生活空間はどうだったのでしょうか。寝殿・対屋は、母屋の四周に庇(ひさし)を取り付けた大陸伝来の建築構造に、濡れ縁を巡らせ、内部は柱だけで壁はほとんどない開放的な構造でした。建屋の周囲は部戸(しとみど)を釣り、妻戸を設け、殆どワンルームの室内は板敷きとし、生活のための間仕切りには、簾(すだれ)・几帳(きちょう)・帳台(ちょうだい)のカーテン状のものや屏風(びょうぶ)、衝立(ついたて)のパネル状のものなどを用いました。夏は半屋外の明るく風通しの良い濡れ縁や庭に面した舞台上で生活したと思われる。

今回見学予定の円成寺の本堂は、平安時代末期に京都から寝殿造の対屋を移築した記録があったことが分かっています。残念ながら、応仁の乱の戦禍でその建物は焼失しましたが、直ぐに原状と変わらず再建されたと伝わります。ひょっとして寝殿造の対屋の姿そのもの？ 外観は、何となく住宅風のやさしい佇まいに見えませんか。

本堂の内装をご覧下さい。高御座(たかみくら)が安置された内陣に向かって美しい化粧垂木が架けられ、その下に開放的な外陣があり、東西に附室が並んでいます。まさに大らかな平安時代の住宅内の雰囲気ではないでしょうか。

円成寺庭園は、昭和50年に森 蘊(もり おさむ)氏の手により往時の姿に修復されました。現存する最も古い庭園の一つで、こちらも平安時代の貴重な遺構です。本堂と併せて寝殿造の雰囲気を感じて下さい。



円成寺